

## タカラバイオ株式会社 平成27年3月期決算説明会 質疑応答内容

平成27年5月13日（水）

ロイヤルパークホテル（東京都中央区）

回答者 代表取締役社長 仲尾 功一、専務取締役 松崎 修一郎

### 【バイオ産業支援について】

（質問）

研究用試薬の売上が、引き続き好調なようですが、この傾向は、いつまで続くと予想していますか。また、中国、米国の研究用試薬の市場環境についてどのように考えていますか。

（回答）

日本の環境は、AMED（日本医療研究開発機構）の発足などもあり、引き続き政府のバイオ、ライフサイエンス研究予算は安定的に増加すると予想しています。ただし、注力する研究分野の変更などの影響を受ける可能性は高いので、準備を怠らないようにしなければならぬと考えています。

中国は、数年前までは年間120%以上の成長率でしたが、ここに来てスローダウンして110%台になっています。しかし、依然としてその他の地域より高い成長率です。売れ筋の製品は、PCRやqPCR関連製品が中心で、欧米日のトレンドより数年遅れているようです。

米国は、従来型の遺伝子工学研究製品の動きは鈍くなってきています。反面、NGS（次世代シーケンサー）の試料調製用の試薬・キットなどを中心に売上が好調です。米国では、先端研究用製品などを中心とした製品のポートフォリオ構築に尽力しています。米国では、未だ、当社製品の浸透の余地は十分にあると考えています。

（質問）

CDMO事業について、競合他社と比較した場合の強みはどこですか。

（回答）

品質管理が重要な分野の1つと考えていますが、当社は、遺伝子解析受託を始めとした研究受託や、遺伝子治療の臨床開発について豊富な実績とノウハウの蓄積があり、細胞加工・品質管理など、この分野でお客様の多様なニーズにOne Stopで対応できる数少ない企業だと自負しています。

### 【遺伝子医療事業について】

（質問）

HF10 の臨床開発、商業化の方針について説明下さい。また、治療費用についての考えを聞かせて下さい。

(回答)

早期に商業化することを第一に考えています。製造・販売承認を早期に得られるように各種制度を活用したいと考えています。臨床開発については、免疫チェックポイント阻害薬との併用が現実的だと考えており、治験デザインもその点を考慮しており、HF10との併用による効果、利点を示したいと考えております。治療費用ですが、再生医療等製品という新しいカテゴリーであり、国内外においても、類似品の実績がないため、現段階ではコメントできる状態にありません。類似薬を開発しているアムジェン社 T-VECが米国で承認申請をしているようなので、この動きを見守りたいと思います。

【その他】

(質問)

内部留保（現預金）の用途について説明下さい。また、M&Aについての考え方を聞かせて下さい。

(回答)

この2～3年間、滋賀県草津市に遺伝子・細胞プロセッシングセンターや新研究棟の建設などの大型の設備投資をしましたが、これで一巡と考えています。この先、しばらくは、大きな設備投資は計画していません。一方、研究開発費は、遺伝子医療事業の臨床試験が進捗するに従い、増大する可能性が高く、この点で準備は十分に行い、機動的に対応できるようにしたいと考えています。

M&Aについては、新技術や当社に不足している技術の導入の一部として考えています。必要な技術があれば獲得したいと考えており、その際にM&Aや事業買収も取りうる手段の一つとなります。

以上